

特別賞

もちの木

坂本 梓 徳島県美馬市 十四歳

「もちもちの木」では臆病豆太が勇気を奮い立たせて、本当のやさしさ・思いやりがわかるようになっていた。でも私にはそれが無い。庭にあるもちの木には何がなくてもよく登るけれども、それで優しくなれることはない。でも私はそこで安らげる。石川啄木ではないけれども、心が空に吸われていって、もやもや・苦しみ・悲しみが消えていく。コロナ禍で外出できなくなってももちの木は私をずっと支えてくれる。先日はその姿を応援してくれていた祖母が亡くなった。今は夏だからもちの木には緑の葉が生い茂り登るのが大変だ。それでも上を向いて登る。私を支えてくれた人が天に昇るのを近くで見たいからだ。お空から私の成長をみていてね。そう思いながら今日もちの木に登る。やさしくなんてない私。それでもみんなに支えられているという事は分かっている。分かっているけれども、一体何者になりたいのか分からない。分からないけれども受験生だ。だから学業にはげまなければならない。暑い夏だ。身も心も溶けそうだ。でも祖母が見守ってくれている。努力しないわけにはいかないではないか。いつも見守られているのだから一生懸命にする。覚悟を決めた。やろう。臆病なのは豆太と変わらないかも。違うのは年齢。モウ来年には高校生になる。臆病なままではいけない。自尊心を高めるためにも努力をしよう。そうしてもちの木に登って祖母に次に進めたと、いい報告をしよう。